北海道の印刷出版文化情報誌
季刊アイワード
Quarterly i WORD
クォータリーアイワード
2023年10月
第19号（通巻365号）

THIS IS MECENAT 2023

特集

北海道の野生生物を守り続け、魅力を伝える——

地域の保護活動などを支援する
公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

シリーズ「北海道のジオパーク」❸ …… 十勝岳ジオパーク〔美瑛町・上富良野町〕

ほっかいどうの本 ……『北の縄文さんぽ』 …… デーリィマン社
『ウイスキーと風の味』 …… 共同文化社
『学校の夢　へっぽこ教師からの出発』 …… 共同文化社

特集

北海道の野生生物を守り続け、魅力を伝える

地域の保護活動などを支援する
公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

北海道新聞野生生物基金の事業内容

普及啓蒙事業
シンポジウムやフォーラムの開催

出版事業
『モーリー通信』の発行

自然体験事業
自然・環境出前講座
環境エクスカーション

助成事業
自然・野生生物保全の団体・個人助成

コンテスト事業
北海道野生生物写真コンテスト
夏休み自然観察記録コンクール

カレンダー販売事業
オリジナルカレンダーの発行、販売

調査事業

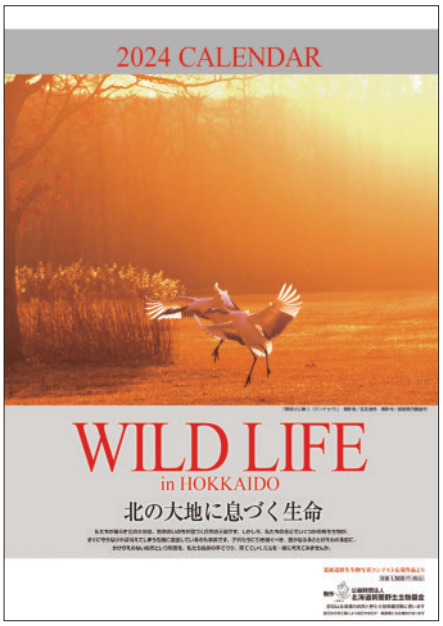
「北海道の広大で豊かな自然環境に生きる野生生物を未来に引き継ぐ」ことを目的に設立された公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、30年以上にわたり北海道の自然を守るキャンペーンの中核を担ってきました。地域に根差した野生生物の保護や調査研究に取り組む団体などに活動資金を提供しているほか、全道各地の学校などへ動植物の専門家を派遣する「自然・環境出前講座」の開催など、多彩な事業を展開しています。同基金理事の三浦高広事務局長、基金の評議員を務める金子正美酪農学園大学名誉教授に取り組みの概要や展望について聞きました。

（文・写真／片山健一　取材日2023年8月28日・9月4日）

基金の事業運営を担う
三浦事務局長

評議員の
金子酪農学園大学名誉教授

野生生物カレンダーは、ラムサール条約第５回締約国会議を釧路市で開催した1993年に、全道の企業や団体へ協賛を呼びかけてスタートしました。この時に協賛金の一部を社会還元し、以降、30年の長きにわたってカレンダーを発行し続けています。



北海道新聞野生生物基金の成り立ちと意義

北海道新聞野生生物基金は、北海道新聞社の創立50周年を記念して１９９２年に設立されました。その頃から、温暖化の影響で永久凍土が解け始めるなど、地球規模の環境破壊が叫ばれつつありました。北海道内では、大規模公共事業、農地開発、森林伐採等による土地の改変により、自然環境は大きく変化し、これに伴ってヒグマの個体数の減少や、エゾシカの爆発的な増加が起こる一方、一時は絶滅寸前だったタンチョウが手厚い保護を受けながら徐々に増加するなど、野生生物の保護や山林や河川などの自然再生に対する市民の関心が高まっていました。

「１９８０年代の知床国有林伐採問題に代表される、開発を進める行政と自然保護団体との対立の時代から、自然を守ることを教育やビジネス、地域振興に役立てる方向へと転換しなければならない時期に、マスコミである北海道新聞社が、北海道の自然環境保全に特化した基金を設けて広報することには大きな意義がありました」と、長年にわたり基金の各種事業に携わってきた金子正美さんは話します。

基金が行う事業の原資は、北海道新聞社が拠出した1億円の基本運営資金と、道民や企業からの寄付金が柱です。「基本財産を債券などで運用した収益も事業費に充てていますが、低金利政策の影響で運用益は少なく、基本的には寄付金に頼っているのが現状です」と事務局長の三浦高広さんは説明します。

このほか、１９９５年から続く「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品でカレンダーを製作して、収益化を図っています。さらに、２０２１年からは継続的で安定した財政基盤を確立するため、年会費制の「サポート企業」を募集し、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）活動の一環として約40社が基金の運営を支えています。

地域主体の自然保護活動を支える助成事業

基金の主要な取り組みとなっている助成事業では、道内各地域で自然保護のために草の根的な活動を行う団体などに資金を拠出しています。２０２３年度の助成事業には18件の申請があり、南幌町（なんぽろちょう）のＮＰＯ法人ふらっと南幌による「幌向（ほろむい）湿原再生事業（湿生植物の移植）」や、羽幌町（はぼろちょう）の北海道海鳥センター友の会の「天売島（てうりとう）におけるウミスズメ等海鳥の保全活動」など11の団体・個人に総額２９０万円を助成しました。「メインの事業なので、もっと拡充したいという思いはありますが、規模の大きな財団を除けば毎年３００万円程度の助成ができる基金は少ないと思うので、申請者に節約をお願いしながら、より多くの団体に配分するようにしています」と三浦さんは言います。

酪農学園大学の国際交流サークルＳｕｋａＲｅｌａ（スカレラ）も助成金を活用し、マレーシアの留学生と共同で、道内の国立公園を世界に紹介する多言語ホームページの制作に取り組んでいます。インバウンド観光の呼び水にすることのほか、「若者の感性でＳＮＳ（交流サイト）も駆使した情報発信により、自然への関心が比較的低い20～30代に向けて北海道の自然の魅力を伝えてもらえれば」と助成事業の審査委員長を務めた金子さんは期待を寄せています。

１９９３年からの助成事業の累計は３９６件、金額で1億２５８４万円に達しています。近年は、外来種の問題に関心を寄せる団体が増え、トマトやナスなどのハウス栽培の受粉用に導入されて自然繁殖するようになったセイヨウオオマルハナバチの駆除なども支援しています。

三浦さんは「自然保護に関する課

題は山積しているので、一度助成すれば終わりというものではありません。例えば、タンチョウの保護に関しては、さまざまな団体があり、繰り返し助成しています。タンチョウの生息数が増え、繁殖地も道東圏から道北圏、道央圏まで広がったことで、鳥インフルエンザまん延などによる全滅のリスクが軽減できたことは、地域住民の地道な取り組みの成果であり、基金もその一助になったと考えています」と話します。

北海道フラワーソン 2022 での調査の様子
写真提供：北海道新聞野生生物基金

先駆的な取り組みの「北海道フラワーソン」

ユニークな取り組みとして、1997年から5年に一度、6月の第2週に、咲いている花の調査を全道一斉に行う「北海道フラワーソン」を開催しています。フラワーソンは「フラワー・ウオッチング・マラソン」の略語で、見つけた野鳥の種類数を競う、英国発祥の「バードソン」をヒントにしたものです。

6回目となった2022年の調査は、6月18日と19日の2日間に、約2700人が参加し、各地にどんな花が咲いているかを調べました。554地区を調査した400グループから報告があり、得られたデータは約5万6千件に上りました。「新型コロナウイルス感染症の影響で、参加者が少なくなるのではと心配していましたが、多くの参加があり、調査地域も前回並みにカバーでき、継続性のある調査になりました」（三浦さん）。

フラワーソンの開催を提唱したのは、当時、基金評議員の一人で北海道環境財団理事長だった故・辻井達一さんです。実施に向けて辻井さんは、「これからの気候変動が北海道の自然環境に与える影響をモニタリングするためには、市民の力が必要になります。そのためにも市民自らが調査をして、北海道の自然環境を知ることが大切です」と呼び掛けました。

6回の調査による25年間の変化を見ると、1回目にはほとんど見られなかったキバナノコウリンタンポポなどの外来種が顕著に増えているほか、かつては夏に咲いていたチシマアザミなどが6月に咲くようになる〝季節の前倒し〟が起きているそうです。四半世紀にわたり蓄積した数十万件に上るデータの、より詳細な分析や活用方法についても検討中です。

「植物分類学が、花や葉の形状で見分ける方法から、DNAによる遺伝子の分析になり、草花の名前に詳しい人が減ってきています。気候変動の影響が深刻になる中、身近な環境の変化に気付くことができる市民はとても貴重です」と金子さんは、大勢の参加者が楽しみながら花を探し、植物の名前を知ることができるフラワーソンは、絶好の学びの機会であると訴えます。

さらに金子さんは、スマートフォンの普及などICT（情報通信技術）の進歩で、調査や集計が手軽になりつつあるため、経費を削減して開催頻度を増やすことや、植生の似た韓国や中国、ロシアなどと共同で開催して国際交流イベントにもできるといい、「主催する基金の役割がますます大切になると思います」と期待します。

『モーリー』創刊号（左）と最終号となった第58号の表紙

北海道の自然情報を雑誌やイベントで発信

野生生物保護を啓蒙するために、総合自然情報誌『モーリー』を1999年7月に創刊しました。北海道の生物多様性を保全する活動の詳細や、それを支える企業や個人の思い、北海道在住や縁のある作家のエッセー、自然写真家の写真を多数掲載し、年2～4回発行していました。「基金設立当初から野生生物に特化した雑誌を出すことは目標の一つで

無料誌となった『モーリー通信』創刊号（左）と第2号の表紙

した。内容については高い評価をいただいていましたが、有料誌でもあり、読者層の広がりが見られませんでした」と三浦さんは打ち明けます。

『モーリー』は2021年12月発刊の58号を最後に休刊し、2022年からは無料誌の『モーリー通信』へとリニューアルしました。より多くの人に野生生物の現状を伝え、保護活動などを知ってもらうためです。『モーリー通信』は年1回、7月ごろの発行で、全国各地の博物館や主な公立図書館などに配布しています。22年間発行した『モーリー』から受け継ぐ充実した誌面に対し、「『無料誌なのに良い内容ですね』という感想も寄せられています」と編集長を務める三浦さんの表情がほころびます。

30年にわたる活動の歩みを紹介した記念展

今年7月24～26日の3日間、基金の主催、アイワードの協力で基金設立30周年の記念展が札幌市内の道新プラザDO―BOXで開かれました。基金の歩みを伝えるパネルや資料、カレンダー、雑誌『モーリー』のバックナンバーなどを展示したほか、日替わりゲストによるトークショーも行い、多くの市民が訪れました。

トークショーは、初日の自然写真家の山本純一さんが「命の連鎖―北海道の野生―」、2日目は北海道大学総合博物館の大原昌宏教授が「人と昆虫」をテーマにそれぞれ講演し、最終日は金子さんと旭山動物園の坂東元園長の2人で「野生動物との共存の未来」について、マレーシアのボルネオ島にいるゾウやオランウータンの危機的な状況と、北海道の野生動物の未来を重ね、語り合いました。

評議員をボランティアで長年引き受けている金子さんは、「大学での調査研究の成果といった有益な情報は、学生だけでなく、より多くの方に広く知ってもらいたいと考えていました。マスコミを通じて広報することで、現地に出向いて自然を体験したり、出前授業に参加したりしてもらえます」と広報の重要性を強調します。

次世代へ引き継ぐために
全道各地で出前講座を実施

近年、増えすぎたエゾシカなどによる農業被害や、頻繁に人里に出没するようになったヒグマとの事故などが道民の関心事になっています。基金では、北海道の自然の素晴しさと現状の問題点について、共に考えていくための普及・啓発事業にも力を入れています。「次世代を担う子どもたちに自然について興味を持ってもらうことは、基金を継続する上で欠かせないことで、大事な事業だと思っています」と三浦さんは言います。

基金設立30周年の記念展で行われたトークショー

自然と野生生物を守る大切さを周知するため、全道各地の小中学校・高校・大学や市町村が開く講座などに評議員を講師として派遣する「自然・環境出前講座」を実施しています。今年9月には羅臼町にある北海道羅臼高校で講座を開きました。講師の派遣にかかる費用などは全て基金で負担しています。

また、北海道自然保護協会と共催で「夏休み自然観察コンクール」も1994年から開催しており、子どもたちが動植物の生態などを観察し、絵や作文、絵日記にまとめた作品を募集しています。「子どもが自然に興味を持ち、自然を守る意義や自分にできることを考えてもらうきっかけになると思っています。こうした経験をした子どもたちが、大人になって保護活動の中心を担ってもらえれば」と三浦さんは期待します。

基金の今後の課題について、三浦さんは「事業を続けていける基盤づくりが第一だと思っています。二つ目としては、フラワーソンや写真コンテストの参加者にも高齢化の波が押し寄せているので、もっと若い世代が参加しやすい事業にしていければ」と話します。金子さんも「環境教育も、小学生ぐらいまでは参加してくれますが、大学生など20～30代の参加が少なくなっています。若者をターゲットにしたプログラムを検討しなければ、活動の輪が広がらないのでは」と危惧しています。

お問い合わせ先
公益財団法人 北海道新聞野生生物基金
〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内
電話 011-210-5773
電子メール nature@hokkaido-np.co.jp
HPアドレス http://www.aurora-net.or.jp/nature/yasei/

十勝岳ジオパーク

〔美瑛町・上富良野町〕

（文と写真・片山健一　取材日2023年9月5日）

火山との共生の物語と教訓を後世に伝える

「丘のまち」美瑛町と、「ラベンダーのまち」上富良野町をエリアとする十勝岳ジオパーク内には、世界中から観光客が訪れる「青い池」をはじめとした絶景ポイントがいくつもあり、温泉も点在しています。美瑛町「丘のまち郷土学館『美宙』」や「上富良野町郷土館」など拠点施設やジオサイトを巡ると、両町のシンボルになっている「丘」や「ラベンダー」など豊富な観光資源の多くは、火山と共生する人々の営みの中で培われたことが分かります。

荒涼とした噴火堆積物と高山植物が見られる「十勝岳望岳台」

噴火が生み出した連峰と波状丘陵

100万年前からの火山活動が、標高2千メートル級の山々が連なる雄大な十勝岳連峰を形づくりました。ほぼ30年周期で噴火を繰り返し、今も噴煙を上げる活火山の十勝岳には、溶岩流や火砕流、泥流などの堆積物が数多く残っています。車で行ける標高930メートル地点の登山口「十勝岳望岳台」でも、その痕跡が観察できます。

十勝岳の麓には、緩やかに波を打つような農地が広がります。この独特の地形も火山活動によるものです。十勝岳が誕生する以前の300万年前から100万年前までの間に複数回、火砕流を伴う巨大噴火があり、火山灰や軽石などの堆積物が凍結と融解を繰り返して細かく砕け、なだらかになり「波状丘陵」という地形を形成しました。

この「波状丘陵」を覆う原生林を約130年前に入植した開拓民が開墾し、広大な農地にしたことで、現在の景観が出来上がりました。火山灰の土壌は、栄養分が乏しいため、畑を細かく区切り、ジャガイモや小麦、豆類、甜菜など、毎年植える作物を入れ替えて連作障害を防ぐ輪作体系を構築しました。隣り合う畑に開花や収穫時期の異なる作物が育つ景色が、つぎはぎ状に見えることから「パッチワークの丘」と呼ばれるようになりました。

フランス原産で香料となるラベンダーも、北海道の気候が生育に適し、火山灰土壌の傾斜地でも栽培できるため、1948年に上富良野町の農家が日本で最初に農作物として栽培を始めました。香料に使われることは少なくなったラベンダーですが、今は地域の観光資源として公園など至る所に植えられています。

十勝岳噴火の教訓を後世に

十勝岳はかつて、両町に大きな悲劇をもたらしました。1926年5月24日、噴火に伴う融雪型泥流の「大正泥流」が発生し、上富良野を中心に144人もの死者・行方不明者を出し、硫黄を含んだ土砂とおびただしい流木が押し寄せ、93ヘクタールの農地が一瞬にして不毛の地と化しました。そんな絶望的な状況から立ち上がり、「二度目の開拓」と呼ばれる復興を成し遂げた地域住民の物語を、旭川市出身の小説家・三浦綾子が、多くの被災者に取材を重ね、小説『泥流地帯』として書き上げました。

1962年6月29日の噴火でも、硫黄鉱山事務所が破壊され、5人の犠牲者が出ました。「こうした災害の教訓を後世に伝えることも、このジオパークの重要な役割です」と十勝岳ジオパーク推進協議会事務局の宮崎敏行さんは話します。

「大正泥流」が流下した富良野川や美瑛川には、泥流などをせき止める火山砂防施設が整備されています。1988年の噴火を契機に、翌年、美瑛川に緊急整備された砂防堰堤の上流側にできた池が、観光名所の「青い池」です。また、白金温泉で住民らの避難用に整備した橋も「白ひげの滝」や青く見える美瑛川の流れが見下ろせる「ブルーリバー橋」として観光スポットになっています。

大正泥流で被災した線路などを展示する上富良野町郷土館

サポーターやガイドが続々誕生

ジオパーク推進協議会では、知識の共有を目的に「防災」「火山と水と気候」「地形と地質」「生態系」などの講座を開いています。3年間に6講座以上受講すると「ジオサポーター」になり、講座を全て受講して筆記試験と面接試験に合格すると、ジオパーク内を案内する「ジオガイド」に認定されます。現在17人のガイドが活躍中です。

2021年十勝岳ジオパークフォトコンテスト第1期優秀作品賞「駆け登る」（鈴木智博さん作）。「波うつ丘」にさまざまな農作物が栽培されています

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

北の縄文さんぽ

ドニワ部　種田　梓　著
四六変型判　148頁　1980円
デーリィマン社　発行
011・231・5261
978-4-86453-092-7

突然ですが「学校で習う日本史で一番得意な時代は？」と問われたら、皆さんはなんと答えますか？　何よりも最初に習う「縄文時代」と答える方が多いのではないでしょうか！　「縄文時代」といえば土器、土偶、貝塚、竪穴式住居……様々思い浮かぶことでしょう。

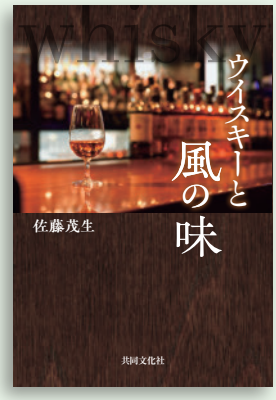
この『北の縄文さんぽ』には、土偶や埴輪に魅せられた著者が「おもしろい！　かわいい！　カッコイイ！」と、ときめいた北海道の遺跡や施設の紹介が、ポップに明るく楽しく詰め込まれています。教科書ではなかなか学ぶことのできない、北海道独自の「続・縄文時代」「擦文（さつもん）時代」にまつわる遺構・遺物も盛り沢山です！

学問的な難しいことはさておいて、土器、土偶はもちろん、洞窟から博物館までなんでもありの、ときめき『北の縄文さんぽ』に繰り出してみませんか？　きっと今まで知らなかった新たな北海道の歴史・魅力に出逢い、もっと「縄文時代」が得意に、北海道が好きになることでしょう。

（東京営業部　本間朱音）

ウイスキーと風の味

佐藤　茂生　著
四六判　168頁　1870円
共同文化社　発行
011・251・8078
978-4-87739-385-4



世界の五大ウイスキー（スコットランド・アイルランド・アメリカ・カナダ・日本）のなかでも、近年、世界的コンクールで多数の輝かしい評価を受けるジャパニーズ・ウイスキー。本書で日本のウイスキーについて語る著者は、ニッカウヰスキーで第3代のマスター・ブレンダーを務めた佐藤茂生氏です。

ウイスキーづくりに必要なものは、おおよそ5つあると記載されています。①厳選された材料（仕込み樽も含む）。②良質な水。③熟成期間（天使がその代償「取り分・分け前」と引き換えに与えてくれる時間）。④良い風土（適切な環境）。そして、⑤豊富な経験と鋭敏な感性を持つ熟練のブレンダー。これらが複雑玄妙に融合されたときにはじめて「至高のウイスキー」が完成します。

北海道余市（よいち）の自然を味方につけ、計算しつくされたブレンドの妙技に、ただ感嘆するばかりです。熱心に、ひたむきに最高峰を目指したマスター・ブレンダーの姿から、プロの仕事振りを学べます。

（クリエイション部　丸山　篤）

学校の夢
へっぽこ教師からの出発

高向　よしのぶ　著
四六判　324頁　1500円
共同文化社　発行
011・251・8078
978-4-87739-387-8

本書は小学校の校長を務めていた著者が、昨今の教育現場で課題として挙げられる「教師の指導力向上」、「児童の自主性の育て方」、「いじめ対策」などに関して、自身の体験と教育理論に基づいて解決策を伝える教育書です。

教育書といっても堅苦しいものではなく、実際の児童との実際にあったやり取りが描かれ、臨場感に溢れているので「自分のクラスにもこんな同級生がいたなぁ」と誰もが思い浮かべながら読み進められるストーリーとなっています。

著者が自らを「へっぽこ」と称した新人教師時代から校長になるまで、立場や環境が変わろうとも一貫して児童のことを一番に考え、愛情深く接してこられたことが伝わってきます。

その接し方は非常に考えられたものであり、学校教育だけではなく、家庭における子育てのヒントとなるエッセンスも多分に盛り込まれています。教育者を目指す方だけではなく、全ての子育てに関わる方に読んでいただきたい一冊です。

（企業研修生　鹿取大祐）

新刊情報

書名の下の数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

改訂新版　北海道の高山植物
978-4-86721-103-8
梅沢　俊　著
A5変型判　368頁　3080円

青ちゃん流　失敗知らずの定番料理
978-4-86721-105-2
青山　則靖　著
A5判　164頁　1760円

石狩川ものがたり
978-4-86721-102-1
ともに歩んだ大河と人々の歴史
『石狩川ものがたり』研究会　編
A5判　160頁　1980円

伊藤健次の北の生き物セレクション
978-4-86721-106-9
伊藤　健次　著
A5判　192頁　2200円

ヒグマは見ている　道新クマ担記者が追う
978-4-86721-110-6
内山　岳志　著／北海道新聞社　編
B5判　104頁　1430円

北海道の貨物列車
978-4-86721-111-3
原田　伸一・伊丹　恒　著
B5判　184頁　2420円

道新プラス　道新受験情報
2024高校入試合格データ特集
16747-08
北海道新聞社　編
B5判　266頁　990円

北海道新聞社
〒060-8711 札幌市中央区大通西3-6
☎011・210・5744

新装版　知りたい北海道の木100
身近な街路樹・庭木・公園樹
978-4-906740-57-4
佐藤　孝夫　著
四六判　192頁　1980円

知りたい！　さっぽろの大雨災害
札幌市浸水ハザードマップを徹底解説
978-4-906740-58-1
鈴木　英一　編著
A5判　132頁　770円

大正期北海道映画史―付・道内新聞事情
978-4-906740-59-8
前川　公美夫　著
A5判　484頁　4400円

亜璃西社
〒060-8637 札幌市中央区南2条西5丁目
☎011・221・5396

日本産ゴキブリ全種図鑑
978-4-8329-1412-4
小松　謙之・伊藤　ふくお　著
四六判　200頁　4950円

ブックレット・ボーダーズ　10
知られざる境界地域　やまぐち
978-4-8329-6891-2
井竿　富雄　編著
B5判　80頁　990円

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
☎011・747・2308

おばけのマールとほしぞらのフルコース
978-4-89115-421-9
なかい　れい　え／けーたろう　ぶん
A5変型判　24頁　880円

詩集　死者に接吻
978-4-89115-424-0
佐藤　武　著
A5判　142頁　1650円

揺さぶる絵
変貌する日本画のイメージ
978-4-89115-425-7
北海道立近代美術館　編
A5判　120頁　2530円

中西出版
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
☎011・785・0737

北の縄文さんぽ
978-4-86453-092-7
ドニワ部　種田　梓　著
四六変型判　148頁　1980円

デーリィマン社
〒060-0005 札幌市中央区北5条西14丁目
☎011・231・5261

〈戦争法制〉を許さない北の声
978-4-909281-54-8
髙崎　暢　編
A5判　794頁　4950円

寿郎社
〒060-0807 札幌市北区北7条西2丁目
☎011・708・8565

北海道のヒグマ問題
市街地になぜ出て来るのか　他
978-4-8328-2302-0
門崎　允昭　著
A5判　54頁　1100円

北海道出版企画センター
〒001-0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47
☎011・737・1755

ミシシッピ・デルタ　ストーリー
978-4-87739-389-2
谷村　順次郎　著
四六判　244頁　1980円

忘れないうちに今【第2集】
978-4-87739-388-5
串崎　英子　著
新書判　136頁　1320円

爪句@天空の整理箱
978-4-87739-390-8
青木　曲直　著
100×74ミリ　232頁　500円

歴史論争から見た戦後ドイツ
978-4-87739-391-5
渡辺　将尚　著
A5判　230頁　3960円

共同文化社
〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目
☎011・251・8078

表紙のことば

秋の八剣山（はっけんざん）
今泉　道子
木版画　31・5センチ×41センチ

札幌の中心部から国道230号で1時間足らず、「札幌の奥座敷」と言われる定山渓温泉周辺は紅葉の名所でもあります。豊平川に架かる二見吊橋等の橋から見る紅葉、定山渓ダムや豊平峡ダムの岩肌と湖との紅葉、ゆったりとした舞鶴の瀞に映る紅葉等、見どころがたくさんあります。

その定山渓へ行く途中にあるのが八剣山です。標高は498メートルと低いですが、山頂には剣の様な岩がそびえる危険な山です。麓にはワイナリーがあり、散策をしたり、スケッチをしたりして秋を楽しむことができます。道路沿いにはブロンズ色になったネコジャラシが風にゆれています。

GEM木版画会　会員　札幌市在住

※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL　https://iword.co.jp